

共同体感覚

香川三六（東京）

※不動塾

要旨

キーワード：

はじめにー

アドレリアン3号（昭和62年）に、「アドラー心理学にみる人間観」と題する拙論を発表させてもらった。そのときの1小節に、共同体感覚の項目を掲げて文献的に紹介したが、その内容は、共同体感覚とは何かということを中心に、どうすれば共同体感覚が培われるかについての一文献を紹介し、そのときいただいた問題意識を問題提起したと覚えている。その後、筆者は若干のクライアントと接してみて、「あらゆる失敗者（神経症者・精神病患者・犯罪者・問題児・自殺者など）は、仲間感と共同体感覚が欠けているが故に失敗者なのである（人生の意味の心理学）ことを実感してきた。だからこそ、それら失敗者（クライアント）の治療は、共同体感覚を実体験させるための手段（オルタナティブウェイ）でなければならないということにならざるを得ないのである。

今回の論文では、力と共同体感覚とはどんな関係にあるのか、と、何が共同体感覚の発達を促進するのか、何がそれを阻害するのか、に関する文献を紹介し、若干のコメントと感想を述べてみた。ご批判を仰ぎたい。

引用文献：

人生の意味の心理学

人間知の心理学

オルタナティブ・ウェイ

Social Interest

The Individual Psychology of Alfred Adler

I 力と共同体感覚

1. 「アドラーは、力とは基本的に自分の目的のために他人の活動を操作しコントロールすることと考へた。赤ん坊の頃、子供は泣くことで両親の行動に影響を与えることができると知るが、この能力がこうした幼児期に始まることをアドラーは発見した。赤ん坊としての位置が、両親に

対するこうした力を可能にするのである。このように他人を操作することは、本質的に快感を伴う。例えば、子供はこの他人操作というポジションパワーが成長するにつれて失われていくという現実への適応に苦勞する。現実には、大人になってから、子供の頃の失われた他人操作力（ポジション・パワー）を再確保すべく相当な時間を費やさねばならないわけである。

だが、子供はポジション・パワーをそれ自体のために求めるわけではなく、多くの場合、必要にせまられてこれを求める、とアドラーは考えた。か弱くて両親に大きく依存する赤ん坊にとっては、力は生死にかかわる問題である。したがって、ポジション・パワーは子供にとってきわめて大切なものであるし、大きくなって自分自身で身を守れるようになって、子供はこの力を保持し続けようとする。

子供時代が過ぎても、他人の尊敬や承認をかちとる上で何らかの力不足を感じるような人の場合は、この力を求める欲求が強く表れる。こうした人達は、この、感じられはするが、意識はされない弱点をカバーすべく、他人の注意を惹こうとして努力する。この点に関してアドラーは今日よく知られた興味ある二つの概念—劣等感と補償—を考え出した。劣等感に悩む人は、その根拠が現実的であるか否かにかかわらず、潜在的に無能感を持つ。無能の故に達成が難しいと（思いこみ）感じているところの目標や目的の達成に極端に大きな努力を注ぎ、劣等感を補償しようと試みることがある。ハッキリとは意識されない対象に、極端な努力を払った結果、過剰補償（Over-compensation）になってしまう。その対象がなんであるかがハッキリ認識されると、現実との関係が明らかとなり、努力（行動）によって現実的なものになる。」

2. 「力を求める努力、人類の文化のなかで最も際立ったこの悪に対して、どのように対処し働きかけたら一番有利であるか、という問題に関しては、難しさは、この努力が表れてくるときに、子供と理解しあうことが非常にできにくいということのなかにある。われわれは、ずっと後になって初めて、事を明らかにし、誤った発展を矯正する処置をし始めることができるのである。だが、この時期の子供と一緒に生活してみれば、このことに加えて、どの子供にもある共同体感覚を発展させて、力を求める努力が過剰にならないですむようにする可能性があることが分かる。」

(注) 力（パワー）：自分の目的にかなうように他人の行動を操作しコントロールすること。力には地位によるもの（ポジション・パワー）と、人格によるもの（パーソナルパワー）とがある。人によってはこの両者を兼ね備えている。

3. 「われわれは皆、自分が強く、他に勝り、完全であると感じるようなものを獲得することによって将来の目標に達しようとして努力している。デューイ教授は、この傾向のことをきわめて正當に、確かさを求める努力と呼んでいる。だが、われわれがそれに何と名づけようと、人間のなかには常に、この線に沿った大いなる活動—劣等の地位から優越の地位に、敗北から勝利へ、下から上へ登ろうという努力—が見出されるであろう。それは、幼児期のもっとも初期に始まり、人生の終わりまで続く。人生というものは、この惑星の表面において、諸々の障害を乗り越え、諸困難を克服しようとして生き続けることを意味する。

それ故、われわれが、まさしく同じ傾向を犯罪者のなかに見出したとしても、驚くべきではない。彼は、優越しよう、諸困難を克服しようとして努力していることを示している。彼を他から区別するのは、彼がこういう仕方で努力している事実ではない。むしろ、それは、彼の取る方向なのである。そして、それが、この方向を取るの、彼が社会生活の諸要求を理解しなかったから、そして仲間の人間に心を配っていないことを、われわれが理解するや否や、彼等の行動が完全に理解し得るものだということが分かるであろう。

4. 「心のなかには、すべての精神的出来事に影響を与え作用する二つの方向線が支配しているということ、そして、人間は、生の諸条件と確かさを造りだそうとする際に、また人生における三つの主要な課題（愛・職業・交友）をなし遂げようとする際に、自分の共同体感覚を行動で示すとともに、力と評価を求める努力をも完遂しうる、ということである。

われわれは、どのような種類の精神現象であれ、常に、これら二つの要素が互いにどのような量的および質的關係に立っているかに従って判断するのに習熟していかなければならないし、また、人間の精神をさらによく理解したいと思うならば、いつもこういう方向に向かって研究していくのに習熟していかなければならない。なぜなら、これら要素の存在は、人間がどの程度まで人間の共同生活の論理を理解し得るか、そして、この論理によって要請される分業にどの程度まで順応できるか、を規定する。」

5. 「失敗者は、三つのタスクに、共同と連帯の努力によって解決され得るのだという確信なしに近づく。彼等が人生に与える意味は、私的な意味である。つまり、彼等が自らの目標を達成したときに、彼等以外の誰も利益を受けないし、彼等の関心はただ彼等自身にしか及ばないのである。彼等が成功しようと努力する目標は、個人的優越に過ぎず、彼等の勝利は彼等自身にとってだけ何か意味あるものに過ぎない。自分にしか眼中にないのである。われわれの有意義性はすべて、他者の生に貢献することのなかに本質を持つのだということに悟らないならば、われわれは常に間違いを犯すのである。」

6. 「成長の過程で大した緊張場面を経験しなかった子供の場合、力への欲求が社会的連帯の關係を完全にしたいと望む気持へ次第に変わっていく事実をアドラーは発見した。」

以上6つの論文を抜粋してきたが、これによってみる限り、力と共同体感覚とは、相対的な關係にあるものと思われる。われわれの人生における行動にとって何が重要かと問われれば、自分自身の利益のみのためという方向へ努力をするのではなく、共同体感覚にもとづいたという方向を選択した決断と実行をすることと結論づけられる。とりわけ、劣等感が強すぎると、力と優越を求める努力が高められ、自らいだいた高い目標に向かって余りにも大きな目立った行動をし、そして、まわりの人々に対する配慮もなしに自分の立場を確かなものにしようとする。

つまり、他者の生活を妨げながらである。われわれは先ず自らの劣等感を克服する必要がある。劣等感を克服する方法は、アドラー心理学虎の巻に述べられている。「共同体感覚は、劣等感とそこから生じる権力欲の絶えまのない影響下に立っている。」

そして「人間相互間の違いというものが、共同体感覚の大きさと、力を求める努力の大きさによって規定される。それが表面に表れた形態こそが、性格と呼ばれるものである。」という確信が必要だと思う。

II 共同体感覚の育成

「共同体感覚は、ことばで議論するので議論するんじゃないくて、あるセッティングをして、共同体感覚を実際に体験させちゃう。」

「われわれ自身の共同体感覚は、結局は、われわれ自身の力で発見するしかない。親や教師は、援助はできるかも知れないが、それは馬を水辺につれて行くようなもので、水を飲むのは馬自身なんだ」

この考え方はホントウだと思う。そこで、親や教師や大人が、どのようなセッティングをすれば共同体感覚がプラスの方向へ延びるのか。また、何がマイナスの方向へ向かわせるのかについて、諸文献を模索することにした。

1. 乳幼児期「ライフスタイルを決めるのに誰よりも大きな影響を与えるのは、母親なのである。…人生の極めて早い時期に、ライフスタイルは主として母親の影響下で形成される。」

乳児が初めて会う他者は勿論母親である。

母親は乳児の泣声によって、空腹なのか、お尻がぬれていて気持ちが悪いのか、虫にさされて痛いのかなどを直ぐ見分けられるようになって、適切な処置をするだろう。そのことから、乳児は、この人生にきわめて信頼し得る他者がいることを発見しそれを感じずにちがいない。

「母親はこの関心のきずなをどのように広げるか、自分の関心をどのように広げていくかを理解しなければならない。」父にも、兄弟にも、そして他の人々へと信頼感を広げる必要があるというのである。

「たとえ、それを母親が好まなくても、自分のものだけにしたいと甘やかし増長させると共同体感覚の発達が妨げられる」

母親は乳幼時期を独占してはならないのであって、この頃から甘やかしは禁物のようである。

「無視された子供とは、信頼に値する他者をついぞ見出したこのとのない者のこと」

乳幼児には、用があってもなくても機会ある毎に、名前をやさしく呼んだりして相手になってやることが重要なのであろう。

「グループは共同体感覚の育つ苗床である」だから幼児が仲間とともに遊ぶことによって共同体感覚は育つ。衣服がたとえ汚れても、仲間と泥んこになって遊ぶのをとめてはならないのである。」

「子供の遊びのなかに、まわりに対する子供の関係がどう形成されるか、子供が他者にどのような姿勢を持っているか、好意的か敵対的が支配しようとする傾向が強いかがどうかを示される。それによって共同体感覚の大きさを確実に測ることができる。遊びのなかに表れるもう一つの要素は優越しようという目標である。命令し支配しようとする傾向が見てとれる。」

母親は幼児の遊びにも注目する必要があるようである。

「人生に対する幼児の態度に、そして後には幼児の態度に、そして大人の態度に持続的に影響を与えるのは、環境が人間に刻みこむ諸印象である。生後数カ月の乳児ですらすすでに、その子が人生に対してどのような態度をとるのかを確認できる…子どもの心のなかで発達してくるものは、子どもに対する社会の諸関係によってますます滲透され、生得的な共同体感覚の最初の兆候が見られ、有機的に条件づけられたもろもろの愛情行為に至る。そしてこれらは、子どもが大人の近くにしようとするまでに達するのである…。」

「その感覚は、一族一民族一全人類へと広がり、それを越えて、地球一宇宙の全生物にまで広がりさえする」近ごろの環境問題の広がり留意し、自分に何ができるかを考えなければなるまい。ことに最近のリゾートホテルー閑古鳥の泣いているーそれに多くの資料を無駄遣いするなどほもっての外のことである。共同体感覚でなくエゴにもとづく行為といわなければならない。

2. 児童期

文献のなかから、アットランダムに目につくままに拾いあげてみる。

(1)「成長の過程でたいした緊張場面を経験しなかった子供の場合、力への欲求が社会的連帯を完全にしたいと望む気持ちへ次第に変わって行く。オープンで信頼に満ちた環境のなかで、恐れ

や疑いなしに他人と接したいと望むのである。このようにして人間は、自分をとりまく状況のなかの他人を意のままに動かし操作するという力の課題達成的側面への関心から、他人への信頼と尊敬という社会的関係への関心に移っていくのである。この人間の関心の変貌は、緊張の多い子供時代を体験し、他人を信頼することを学ばなかった人の場合しばしば遅れる。こうした場合、力への欲求が持続するばかりでなく、成長につれて強くなる。」

この論文からいえることは、子供に対して勉強しなさいとか、遊んではいけないとか、あしなさい、こうしなさいとガミガミ毎日のように子供に言うのは禁物のようである。いつか野田先生から「家庭から一切の命令を追放しよう」と聞いたことがあったことを思いだした。「命令する代わりに依頼しよう」ということであつたと覚えている。

(2)「まわりから何らかの仕方で圧迫を受けていると感じている子供の場合には、教師の働きかけに従うという能力や傾向が少ないということが予期できる。盲目的服従は自分にとって必要な処置や行為を他の人が命令するのをいつも待っているというような人になる。」

この論文も同じようなことを述べているように思われる。「お母さんのいうことをよく聞きなさい。」と毎日のようにいうのは、他の人が命令するのをただ待っているような人間をつくることになる。

(3)「われわれの家庭教育なるものは、大抵、子供の名誉心を特別刺激し、彼等のなかに偉大という観念を呼び起こそうとしている。われわれの文化のなかに偉大という観念を好む傾向がある。これが挫折を引き起こす。」

(4)「子供に余りにも多くを要求しすぎることによって子供に自分の無力を鋭く心に刻みこませてしまう。」

子供に対して高望みをすること、偉大を要求することはいましめなければならない。親や教師が子供に高望みをすれば、子供は自分を無能だと思ひこむ。子供はいつも人に笑われるのではないかという恐れの中かで成長させてはならないと思う。「この笑われるのではないかという恐れは人生のずっと後の時期まで続き、大人になっても開放されない…」

子供をあざ笑う大人がよくいるが、大人は何の気なしであっても、子供の共同体感覚の発達にマイナスの作用をする。げに気をつけなければと思う。

(5)「劣等感が特に心を圧迫する場合は、子供は、将来の生活で損をするのではないかという不安のあまり、単なる妥協では満足せず、行き過ぎるという危険が生じる。力と優越を求める努力は、異常に高められ病的にさえなる。このような子供達にとっては、人生の通常の関係は十分なものではなくなる。彼等は自分の高く設定した目標に向かって、あまりにも大きな目立つ行動をしようと試みる。特別の性急さや強い衝動をもって、そしてまわりの人々に対する配慮もなしに、自分自身の立場を確かなものにしようとする。他者の生活を妨害しながら、それに侵入する。」

子供が強い劣等感を持たないように親や教師は十分の配慮をしなければなるまい。

(6)「子供が人生を何か困難なものだと感じるようになることによって子供の共同体感覚はひどく破壊されるという危険に脅かされる。共同体感覚は劣等感とそこから生ずる権力欲の絶えざる影響の下に立っている。」

強い劣等感をいだかせることは何としても禁物であるようである。

(7)「子供の関心・愛情・協力をかちとることに失敗するなら、子供の仲間に対する仲間らしい感情を身につけることが非常に困難になる。」

親子関係が適切でないと共同体感覚の発達に悪影響があるということであろう。

(8)「きわだった才能の子供がいて、その次の子は問題児になり易い。次男が魅力的であるとき、長男は無視されたと感じ易い。」

このような状態がめずらしいわけではない。心しなければなるまい。

(9)「共同体感覚の発達にとって、他の子供に対する関心が極めて重要である。ひとりの子供が母のお気に入りであると、他の子供達はその子を仲間に入れなかったりする傾向が大きい。」

これも(8)と同じ意味合いである。

母親たるものは心して子供に接したいものである。

(10)「両親が社会からひどい目にあつたことなどを子供の前で不平をいうと子供の共同体感覚の妨げになる。両親が他人を非難したり批判したり、悪感情や偏見を示したりしても同じことが起こる。」

会社に勤めるサマリーマンの家庭の夕食のありさまが目につく。やたら会社の同僚や部下の悪口をいう親を知っているが、その子供は二人とも登校拒否をもってこれに報いた例を知っている。

(11)「子供に協同してもムダだという経験をさせてはならない」

協同したときは無条件にエンカレッジすることだ。貢献感はそのようにして育つ。協同する勇気もてるようにしなければならない。「勇気とは協同し得る能力の一部である。」

(12)「子供が他者に囲まれて追いつめられていると感ずるなら、他者は敵対的であると感ずるなら、その子供は友人を作ったり、自らよい友人になることは期待できない。また、子供が他者は自分の奴隷になるべきだと感じているなら、その子供は他者に貢献したいとは思わない。」

このように感じる子供がいたとき、親や教師はこの子どもにどんな風に接したらよいのだろうか？ アドレリン各位の討論を期待したい。

おわりに

野田先生に連休あけまでという条件で原稿を書いてきたのでこのへんで打ち切ることにする。

4月のヒューマンギルドの先生の講座で、自立ということを参加者全員で討論するという場が設けられた。筆者自身は次のように結論することで納得したのでそれを述べて終わりにする。

自分にふりかかってくるタスクは、他者のせいではなくすべて自分の責任であると考えて対策を選択し決断しその実行に努力するというプロセスを自立というが、その決断の選択の方向は共同体感覚にもとづいた（共同体に役立つ）ものでなければならないと。

(注)「 」内はすべて文献によるものです。

更新履歴

2012年6月1日 アドレリアン掲載号より転載